

2020年コロナ禍で迎えたシンポジウム

村本邦子（立命館大学）

8月のむつでのプロジェクトはオンラインとなった。むつ市長はコロナ対策に強いリーダーシップを発揮して話題になっていたが、4千人大規模接種を目指し市職員全員が運営スタッフとして携わる方針となり、9月末までイベント中止、県外の出入りにも自粛要求がなされていた。残念だがやむを得ない。緊急事態宣言は9月30日まで延長されたが、10月の多賀城でのプロジェクト、むつでのフィールドワークを実施することができた。11月の宮古でのプロジェクトは、協働機関が高齢者福祉を含む事業展開をしているため、対面でのイベント開催はかなわず、オンラインとなったが、フィールドワークは実現した。12月の福島も現地開催を予定して準備中である。

限定された条件下ではあったが、とにもかくにも最終年、院生たちを現地に連れていくことができ良かった。オンラインでのプロジェクトの利点もあり、今後活かしていけるものではあるが、やはり、その土地に身を置き、季節のなかの自然を感じ、土地のものを食し、人々と出会うことにはかなうものはないと思う。

それにしても、ここまで長引くことになろうとは。11月末現在、感染者数はそれほど増えていないが、気温が低い時期に全国に感染者が増加する北海道で徐々に増加していることが指摘され、第六派への警戒が呼びかけられている。



弔いの所作

瀬尾夏美さんは、2月に『あわいゆくころ 一陸前高田、震災後を生きる』（晶文社、2019年）を出版されており、おもにこれに基づいて話をしてくれた。

瀬尾さんは、1988年、東京都の生まれ。2011年3月には、東京藝術大学の4年生で、大学院に上がる前の春休みだった。地続きの場所で大変なことが起きて大変な目に遭っている人がいる。「あなたはどうするの？ボランティア行くの？」など、立場を問われることがあったが、美大生の一人として何をしたらいいのかわからない。それで、まずは見に行こうと、3月30日から、小森はるかさんとレンタカーで東北へ行った。

4月最初に石巻にある知人の実家に寄って出会った食卓。家の天井まで津波がきて、家は残ったが、家の前は瓦礫だらけ。「暖かいご飯食べていきなさい」と食卓に呼ばれた。近所の人たちがみんな被災し、3つの家族が一緒に暮らし、共同で食卓を作っていた。天井まで津波がきて、階段の上にしたから助かったけれど、たくさん車が流されてきて、その中にたくさんさんの遺体があった。

「どうしよう」「弔いをしよう」とみんなで瓦礫を片付け、遺体を寝かせて、一緒の方向から流れてきた干物を遺体の周りで並べて焼いた。蛸をあぶってみんなで食べるという弔いの儀式だった。「でも、その蛸、砂だらけでとても食べられたもんじゃなかったんだよ」とみんなでワッと笑った。衝撃を受けた。市井の人が、未曾有の災害と言われる被災の真ん中で、たった3週間後に弔いの所作を生み出し、語っている。

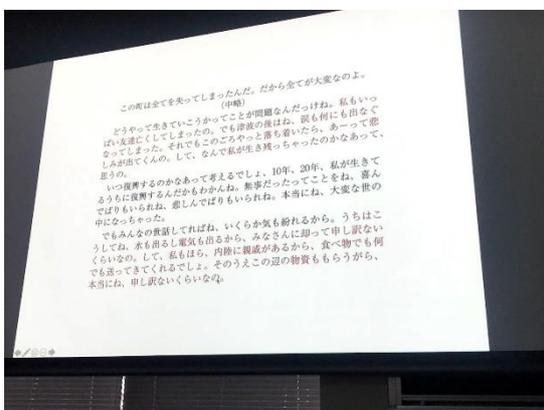
地元の人から、「君たち車があるならもっと現場を見た方がいいよ。もっと北に行き

なさい」と言われ、レンタカーで北上していった。ボランティアをすと言っても、スコップを持ったところで、あまり役に立つこともなく、居場所がなかった。町の人たちが見かねて、話しかけてくれた。お裾分けに近い感じで、「せっかく来たんだからひとつ話を聞かせよう」と。テレビで見て、近づけば怖いと思っていたが、そこに行けば、そこで生きている人たちがいた。

陸前高田のおばあさんが、たくさん話をしてくれた。ここがいかにも美しい風景だったか。たくさんの人々が亡くなった。私たちはすべてを失ってしまった。「私もいっぱい友達なくしてしまったの。でも津波のあとには涙も出なくなっちゃうの。うちはこうしてね、水も出るし電気も出るから、みなさんに申し訳ないくらいなの・・・」。とにかくたくさんさんのことを話す。どうしてこんなにたくさん話すのかと思った時、彼女の後にいるもっと語れない状況にある人のことを語るために語っているのだと気づいた。亡くなった人、もっと大変で語れない人たちの存在を可視化していくものとして語りがある。一人の語りは複数の存在を含み込んでいるのだと思った。

弔いの所作を探しては記述していった。当事者性は薄かった。東京にいと、関わっていいのか、余計なことをしていいのか、そんな権利があるのかなどという議論があり、どうしていいかわからなかった。それでも、陸前高田のおばあちゃんたちが、自分より大変な人のことを語ることに、当事者性のグラデーションを感じた。自分で引き受けることをあきらめてしまったら、グラデーションのつながりを断つことになる。おばあちゃんだって、語るしかないと思いながら

語っているのなら、自分だって語ることをした方がいいんじゃないか。それで、最初は報告会で語り始めた。体験した現地と、もっと遠い場所との間を行き来してつないでいく。旅人の立場で、アーティストとして往復を作る。



波のうえ土のした

語りの背景を想像できる体作りをしないと想像できないし、語ってもらえない。自分が聞けてないのに誰かに渡すことはできない。被災後の変化に自分の体を浸そうと、美しい風景が気に入った陸前高田に3年間暮らした。町を歩いていると、被災した場所に花が植えられたり、花が手向けられたりしている。自分のように以前を知らない人間にはただの草原だが、生きている人が花を手向けるという行為によって、ハッとさせられる。それは、今は不在の人、形なきものを表す行為なのだ。花を手向けることで不在の存在を可視化し、旅人につなぐ。そして、「ここにはこういう人がいてね」と話してくれる。弔いの所作とは表現の原初的な形であり、アートと密接に関わる。

山ぎわの集落にできた花畑に通うようになって、集落の人に話を聞いてきた。「何よりも亡くなった方たちを放っておくことはできない」「生き残った私が何をしなければいけないのか」「またみんなで集みたいの」。その「みんな」には亡くなった人も、遠くに行った人も、これから生まれる人たちもみんな含まれている。最初は切り花を手向けていたが、枯れてしまう。ここに花を植えたらいいいんだ。全部花で埋めよう。土地で眠っている人たちにも触れることができるし、旅人もきれいですねと一緒にいることができる。当事者性という区切りや分断を越えた弔いの場がコミュニティの中心としてあった。旅人も救われる場所としてあった。すごい発明だと思った。

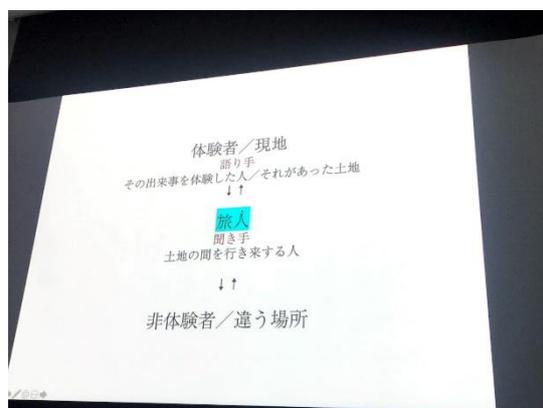
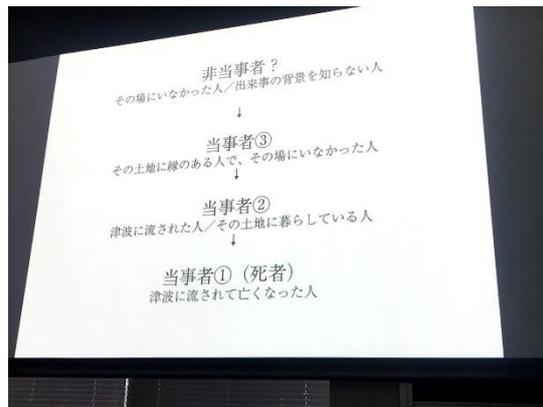
草原のように見えた陸前高田の風景に、花が植えられ、世話し、風景が回復していく。死者と語り合うことで風景を回復して

いく。一緒に眺めることで分断を越えていく。

2011年から2014年にあったそこに、もう一度喪失の時間が訪れた。巨大な土木事業が始まり、現場は回復の道筋をはがしていった。2014年10月9日、花壇はすっかり平らに埋められてしまった。復興ってここで生きてきた私たちをここに埋めてしまうことなのかな。町の人たちは、花畑から育てた花をどんどん抜いて、ボランティアたちに配り、分有していった。

復興事業なのでポジティブなイメージを持ちたいとみんな思っていたし、誰かの希望に水をさすようなことはできない。語りづらい状況が生まれ、土地が奪われていくことに何も言えない。その語れないこと、もやもやを記録する作品をつくりたいと、『波のした土のうえ』ができた。陸前高田の人々の言葉と風景の記録から物語を起こすように構成した。

2015年から3年半かけて、被災地と被災地をつなぐというので、神戸、尼崎、新潟、広島など全国十カ所で開催した。東日本大震災をその場に返してだけでなく、地元の人と話す場づくりをした。展示会は横のつながりを作るが、歴史的な縦のつながりも作ることができる。たとえば広島で陸前高田の写真を見ると、生まれてくるものがある。話を聞いて記録する、作品を作る、展示会をして、その場で話せることを引き出していく。その対話をまた記録する。同時代的に日本中で起きている語れないことを意識に出して記録する。外に開くことができる。共通の物語を作っていくって他の人に手渡す。



二重のまち/交代地を編む

陸前高田は美しい場所だった。湾に向かって開いていく美しい街が、復興工事でどんどん土色になっていった。自分にとっては風景を失っていくことだった。山が崩され、新しい地面、新しい住宅、新しい町を作っていく。「復興工事は二度目の被災」と言う人もいたくらいしんどいことだった。人災でもあると言える。2014年、何キロもあるベルトコンベアーができ、山を削り、土を運び、山を作る。山を動かすことができる。壊れたものを治すためなら何でもしてもいい感じがあった。どこまでやっていいのかの話し合いはなく、鹿や狸も山を追われて住むところがなくなった。自分が苦しくて、2015年、『二重の町』の物語を書いた。日常会話の中で「二重の町」という言葉ができた。かつての営みとともにあることを肯定することになる。

2017年の春頃から、陸前高田では嵩上げた土の上で新しい暮らしが始まった。新しい地面を歩くことはさみしいけれど、町の人たちは、「空が近くなる。亡くなった人に近づいた」と捉えて、ここで暮らしていくことを肯定していく。仮住まいではなくなり、穏やかな表情に変わっていった。復興工事の時の悔しさはなくなったわけでないが、ここで暮らしていく、明かりが灯ることを肯定していくという時間が進んでいく。

そうすると、かつての話が出てこなくなる。被災を語らなくなっていき、2017年、2018年、関西に行くと、「震災の時、私何もできなかったんです」と言う人と会うようになった。遠い場所にいる人の方が、前に進めず、後ろめたさを抱えている。同時代的に両者が出会って、継承が表れるのではな

いか。それで『二重の町/交代地を編む』が生まれた。9年間続ける中で、継承、誰かにつなげていくところまできている。どうしても当事者が語ることが強くなるが、でも、いつまで被災者でいればいいのかという言葉もあったりする。それを追いつけることが選べるように、引き受けて語っていく人が増えていくこと、小さな交換のなかでつなげていくことが大事ではないか。

戦争体験も、70年以上たっても当事者の語りが強い。それは大事だが、それだけだと聞いた人が誤読できなくなってしまふ。聴き手も語り手も、誤読、小さな諦め合いを許し合えるようなことが大事なのではないか。今まさにそれをしていく。すべては引き受けられないかもしれないけれど、少し引き受けていく。わかりきらなくても、一部でも引き受けていく。そんな小さな営みが大切なのではないか。

被災することで大きな傷を抱えて生きる。あまりに大きな負荷をひとりで背負ってはいは苦しい。その人を放置していることは、周囲にも苦しい。語れない人も寂しいし、語ってもらえない人も寂しい。そこをシェアしあうことは、両者にとって大事なことから聞きたかった。分けてもう。代われないけど共に生きる回路を互いに作っていくことをしたいし、そういう時間がみんなにあった方がいいと思う。一緒にしよげかえって、一緒にしんみりする。「阪神の人は被災の先輩。17年たっても復興は終わってないと聞いて恐怖だった。でも、新しい街ができて、それが救いになった。亡くなった人のことをずっと抱えながら生きていていいんだ」と、高田の人にとっては、抱えながら日常を生きる先輩たちの姿が受け入れられた。



この後、院生3名を加えたパネルディスカッションが行われたが、残念ながらメモを残していなかった。終了後、瀬尾さんと先生方と一緒に食事をした時に聞いた話は衝撃的だったが、ここには記録しない。若いアーティストとしての瀬尾さんは頼もしく思った。



2021年3月 コロナ禍のその後

2月23日にシンポジウムを無事終了し、私は24日からオーストラリアに行くことになっていた。先発隊が一足先に出ていたため、私はそのまま渡航した。空港では、カンタスに乗る際、2週間以内に中国に行っていないか、ダイヤモンド・プリンセス号に乗っていないかの確認とパスポートの入念なチェックはあったが、それ以外はスムーズだった。オーストラリアでも、コロナについて新聞やテレビで報じられ、ホテルでも、最新情報や注意事項を書いた紙を配布していたが、街中でマスク姿の人は皆無だった。タクシー運転手が言うには、オーストラリアは早い時期に中国からの飛行機を止めたので、中国人観光客の姿がすっかりなくなり、経済的には大打撃だそうだ。

オーストラリアにいる方が直接的な影響は薄いと感じたが、ネットを通じて断片的に入ってくるメールやSNSは深刻で、あれよあれよという間に状況が変化していった。2月25日、政府は専門家会議の見解に基づき、対策基本方針を取りまとめた。全国一律のイベント自粛要請はしないが、患者集団が確認された地域では自粛の検討要請もあり得るとされた。詳細な理由はわからなかったが、なぜか一日で政策は大きく転換したようだ。26日、安倍首相が全国的なスポーツ、文化イベントを今後2週間は中止、延期、または規模を縮小することを要請し、27日には全国すべての小中高校などを3月2日から春休みまでの間、臨時休校するよう要請したという。一緒に行っていたメンバーたちの中で、子どものいる人たちが臨時休校中の子どもの段取りのため、日本と

電話で慌ただしくしていた。合わせて、講演や楽しみにしていた催しも中止となり、少人数だから決行するつもりでいた院生たちとの合宿も取りやめるようにメールがきた。

帰国したのは3月1日だった。3月上旬は、スペインやフランスなど欧州の広範囲、アメリカでも感染拡大が見られるようになり、WHOは11日にパンデミックと認定した。日本政府の緊急事態宣言をめぐる動きも本格化し、民主党政権が2012年に成立させた新型インフルエンザ等対策特別措置法が改正された。7月開幕が予定されていた東京五輪の開催も危ぶまれ、24日夜、1年の延期が決まった。春の選抜高校野球の中止も決定された。国内の感染者数は3月末に急増し、4月7日、東京、大阪、福岡など7都府県を対象に5月6日まで「緊急事態宣言」が出された。16日には緊急事態宣言の対象が全国に拡大され、ゴールデンウィークの旅行や帰省の自粛が求められた。

大学も卒業式、入学式とも中止され、授業もなくなった。ZOOM会議システムが導入され、教授会や学生との面談もオンラインとなった。最終年度となるはずだったプロジェクトはいったいどうなるのだろう。



つづく